

シンポジウム

遠藤 隆

コーディネーター・テレビ岩手報道部 専任部長

私と岩手医科大学との関わりは古く、入社した翌年1982年、560グラムで生まれた超未熟児の女の子の命を守るため、心臓にメスを入れるというニュースをスクープしたのが始まりでした。

このニュースは日本テレビを通じて全国に大きく紹介されました。

乳児死亡率が全国で最も高いという医療後進地の不名誉を跳ね返すため、小児医療、最先端医療に力を注ぐうち、全国のトップランナーになっていたと言う岩手医科大学の取り組みには感動さえ覚えました。

そして今回のオーダーメイド医療です。

「生命の設計図」ともいうべきゲノム研究の進歩によって病気を引き起こす仕組みの解析が進み、ひいては患者一人ひとりの状態に応じた「オーダーメイド医療」が可能になると言う夢のような話が現実のものとなっています。

しかしそれを可能にするには膨大な医療データが必要であり、データを集めるには患者さんの協力が欠かせません。協力はやはり医師、医療従事者と患者との信頼と言う極めて情緒的な結びつきが必要です。

最先端医療は患者さん一人ひとりのためにあるのであって、研究に邁進する研究者たちのものではありません。

その点、ゲノム研究の実用化ともいべき、オーダーメイド医療の実現には患者さんが研究のための検査に協力すること。

つまり患者あるいは市民の研究への理解、この研究が現実の医療現場で役立つのだと言う理解が欠かせません。

医療従事者と患者という立場の違いによる壁を乗り越えてオーダーメイド医療が実現するとき、患者さんの自由意志による医療や医師による生活の質の向上への取り組みといった、ともすると最先端医療が置き忘れているという批判を浴びかねない課題も、解決の方向に向かうものと期待しています。

今回のシンポジウムが医療を、医師だけのものとするのではなく、医療従事者と患者が、そして市民が共有するための岩手における一助となることを願っています。

講演者プロフィール

1956年東京生まれ。1981年岩手大学人文社会科学部卒業後、(株)テレビ岩手入社。報道部勤務。1996年副部長、2003年専任部長。この間医療関係、農業関係のドキュメンタリー番組を全国放送し、1996年「破壊される海」でギャラクシー大賞。1999年「起きろ寝たきり老人」ギャラクシー選奨。2001年「ガンコ親父と7人の子どもたち」で日本民間放送連盟賞優秀賞など受賞。